

# 21世紀水倶楽部だより

発行：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部  
発行者：大迫 健一  
編集：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部 広報担当  
〒171-0011 東京都豊島区目白2-1-1  
URL <http://www.21water.jp/>  
E-mail [info@21water.jp](mailto:info@21water.jp)

第2号 2008年9月10日号

## NPO 21世紀水倶楽部の活動、もう一つの道

副理事長 安藤 茂

08年度の当NPOの総会では、活動のあり方について会員の間で若干の議論がなされた。

これまでの予算のやりくりを見ていると、繰越額が年々増えていく傾向がある。事業の活発度もあるが、あまり予算を使わないのならば会費を値下げすべきでないか。

活動を活発に行なうためには、財政基盤を確実なものにしなければならない。そのためには収益の上がるような事業をもっと進めるべきでないか。

という二つの意見が出された。いずれも当NPOの活動を進めるにあたってよく考案しなければならない重要なテーゼだと思う。いずれ機会を改めてじっくり議論すべきだと思うが、以下に当NPOの活動について、少しばかり私見を開陳しておきたい。

21世紀水倶楽部の場合、これまで事業活動としては、シンポジウムとか研究集会とかセミナーとかの開催が中心で、そのほかに現場見学会などを行なうにとどまっていた。

NPO設立の目的からすると、自己研鑽して自らの知識レベルを高めるばかりでなく、一般人に向かって「水」に関する知識情報を発信し、啓発を図ることも入っている。しかし会員の経歴、帰属職場への配慮、時間的自由度、コミュニケーション技術の自信欠如、それに性格などもあって、この面の行動がなかなか起こせなかったのである。

ところが先般、事務局長のついで、埼玉県川島町のある小学校から4年生を相手に水のことについて出前講座を頼みたいという話が舞い込んできた。会員自らの手でこの件を消化しようと思ったが、何を話せばいいのか、教材をどうすればいいのかとトンと判らない。時間の制約もあったので、結局外



注せざるを得なかった。幸いなことに、小学生から大学生まで、これまで千人以上を相手に出前講座をやってきた経験を持つ管路管理総合研究所の存在を知り、第1回目はここにお任せすることとした。そしてこの研究所のスタッフがどのように講座(授業)を進めていくのか見学させてもらうことにした。

出前講座は6月下旬のある日、4時間目の授業として行なわれた。字数の都合で講座の中身については省くが、子供たちの目の輝きと講座に対する反応に驚かされた。いつもとは違う先生と授業の手助けするお姉さんたち、そんな物珍しさもあったのだろうが、題材が新鮮だったのが受けたのだろう。東京から1時間半ほどの田んぼに囲まれた小学校の生徒たちは熱心に出前講座に付き合ってくれた。担当したスタッフもこれまでにない反応に驚いたという。

後日、私はこの小学校の校長先生に次のような礼状を書いた。

「(前略)私どもNPOにとっては初めての試みでしたが、実演してくれた管路総研の皆さんは場数も踏んでおり、手馴れたものだと感じさせられました。それにもまして生徒たちの授業における活気というか反応の大きさに感動すら覚えました。NPOが目的としている「啓発運動」というのはこうでなければいけないと、その原点を見させてもらった気がしております。

私どもNPOの会員が自らあのような授業を実行できるようになるにはちょっと時間がかかりそうです。しかし出前講座の仲介の労をとり、啓発活動を実行することは明日からでも出来そうだと自信を深めました。ボランティア活動であっても、世の中には民間企業との直接的接触を嫌う人たちもおります。

(礼状の続きとあとの部分は末尾に続きます)

## NPO法人 21世紀水倶楽部はどこへ行くのか？

理事・事務局長 中川 幸男

今年の定時総会(H20.6.11)で、21世紀水倶楽部の今後の行く道を問う意見が出された。

「次期繰越額は156万円となったのだから、年会費を減額すべきではないか」との意見である。

当倶楽部の収入は、会員の年会費が唯一の収入源である。その収入に対する支出(活動費+管理費)の実績は、平成17年度は66%、平成18年度は53%、平成19年度は67%である。

過年度の活動を振り返ってみると、セミナー、研究集会などが中心で、年間3~4回開催されている。その他、出前講座、何でも相談室などの事業計画があるが、活発な活動になっていない。

これらの活動に携わっているのは、理事会メンバーを中心とするごく僅かの人達である。実働部隊は20人にも満たない。しかも毎年同じ顔ぶれである。当倶楽部は理事を中心とする少数の人達のものではない、会員全体のものである。総勢約70名の倶楽部で1/3弱の会員しか稼働していないのでは、折角の浄財も生かされないのも当然である。低調な活動に合わせて、年会費を減額して、細々と継続する意義があるのだろうか？21世紀水倶楽部は何を目指すのだろうか？

21世紀水倶楽部に入会したのは、NPO活動に参加し、今までに得た知識、経験を社会へ還元したいとの思いであったはずである。であれば、会員各人が何らかの行動を起こさなければ、参加した意味がない。活動資金である会費を納めるだけでは、宝の持ち腐れである。

理事会の企画や提案が悪いという意見があるが、理事会は株式会社の取締役会ではない。理事会は単なるまとめ役であり、何の権限も持たない。会員からの自発的な提案を事業計画にまとめ、その執行を支えるのが理事会の役目である。

過去に理事以外の会員から提案が2~3例あった。残念ながら、提案だけで、「後はよろしく」では、折角の提案も生かされない。行動が伴わなければ、提案も実現しない。提案者が動き出せば、それに対する同調者も出てくるだろうし、支援のしようがあるが、中心となる核が不在では結実しようがない。

繰越資金が増えたから、年会費を減額するのではなく、折角集まった資金を有効に使うことが、当倶楽部の使命である

はずである。小さなプロジェクトでも、運営することは簡単ではないが、多くの会員が勇気を持って参加され、本来の目的を実現するべく努力すべきではないだろうか。

もう1つの問題は、「NPO法人は誰の為にあるのか」ということである。

NPO法人は、公益法人であって共益法人ではない。NPO活動は、社会全般に対して、貢献活動を行うものであって、会員に何らかの利益を与える活動を行うものではない。従って、会費を払って入会したのであるから、何らかの恩恵を得る権利があると思うのは誤りである。

会員のための研究会等を全て否定するものではないが、会員のための研究会で得た知識は、社会に発信するために使われなければならない。得た知識を貯めておくだけでは、研究会の意味がない。

全ての会員が、過去の経験・知識や研究会で得た知識・情報を社会に向けて活発に発信していただきたい。知識・情報を備蓄するだけでは、社会貢献にはならないのだから。

以上、私の意見である。皆様のご意見をお聞かせください。

理事・中川幸男

## 2008年度活動報告

### 上下水道とIT

理事 深堀 政喜

ひと昔前には、下水道管路が高速インターネットの普及に貢献する光ファイバー整備の主役となる華やかな構想がありました。関連する技術開発も盛んに行われ、実用化の段階に進みましたが、ブロードバンドの普及は下水道光ファイバーとは無関係に急速に進行しました。平成19年度末のブロードバンド接続契約数は2,875万件になり、そのうち光ファイバー通信のFTTHは42%を占めていて、DSLに次ぐ普及でしたが、平成20年6月の速報ではFTTHがトップになっています。

IT活動グループにおいても、下水道管路利用の適否や光ファイバー活用範囲の拡大についてセミナー等で議論をし、成功事例の紹介を行いました。市街地の大部分に光ネットワークが普及した状況では「FTTHを下水道で」は過去の言葉になった感があります。

上下水道事業の課題である安心安全の確保や資産運用など効率的な事業運営を行うには、積極的なIT活用が必要だと考えます。そのためのツールとして、先端的な技術が数多く出

現れてきています。光ケーブル整備はそれらの活用のための手段の一部に過ぎません。

最近の IT 関連で特に注目すべきものに RFID、光センサー、GPS があり、公共事業への応用が進んでいます。

認証機能 RFID の代表的なものは IC チップを組み込んだ各種のカードです。電磁波でコードを読み込み、バーコードに比べ飛躍的にデータ量が増加しました。上下水道設備機器の仕様や履歴の管理に応用が期待できます。電源を持ち電波送受信ができる装置も実用化されています。



斜面の崩落監視用光ファイバーセンサーの例

光センサーは水位計や圧力計として既に普及していますが、波長の変化測定により光ファイバーケーブル自体を連続的な歪センサーとして使う方式があり、トンネル等構造物や地すべり監視、空港のフェンス監視等に使われています。

将来は管路の新築改築時に光ファイバーケーブルを貼り付けて、損傷などの長期的な変異観測に応用できる可能性があります。

GPS はカーナビとして身近になりましたが、更に高精度の GPS で管路施設などの探査結果を GIS (地理情報システム) に連動して反映することができるようになってきました。これにより、近接した埋設管との調整や電子管路台帳の機能向上が図られ、改築工事や災害対策などが迅速で安全確実に実施できます。



PS 衛星電波で埋設管の探査データの位置を確定

これらの IT 活用や組み合わせにより、位置と状態がリアルタイムで正確に把握できます。また、それらのデータをインターネットで送信や保存をすることにより、遠隔監視や広

域的な管理が容易になることが期待できます。

例えば、下水処理電力や薬品原単位の全国比較や経時変動の分析により運転の改善やコストの改善に活かすことができます。また、施設設備の建設、補修履歴や土質や周辺環境などの基本情報が常に更新されるシステムの構築によって、アセットマネジメントが適正に行われることが想像できます。

世界中の政府や企業が競いスピード感のある IT 開発には夢があり、その動向に興味をそそります。改築更新の時代を迎えた上下水道施設設備にも有効な IT が適用されることを期待しています。

## 春の研究集会「下水道事業と地域活動」報告

### (2) 東京清瀬、川崎市の事例と討論など

理事 亀田 泰武

2008年4月24日に開催された研究集会紹介の二回目です。

清瀬東京のピオトープづくりについては、「清瀬下宿ピオトープ公園を育む会」の田中くに子氏と望月基子氏からお話しいただきました。

清瀬水再生センターにある 0.43ha の区域について、センター、自治会、小学校の関係者が議論を積み重ね、地域関係者が建設に参加するなどしてピオトープが誕生。ここでは地下水と下水処理水が水源に。メダカ、モツゴ、カワエビなども放流。今ではギンヤンマ、へび、カエルなども見ることができる。育む会では年3回の清掃ボランティア活動を行っている。



小学生による環境体験活動 清瀬下宿ピオトープ

次に、川崎のせせらぎ環境保全活動について、川崎市の「森とせせらぎネットワーク」の河野氏のお話しがありました。

川崎市のせせらぎ水路の計画具体化の時点から、市民との協働がはじまり、2003年に水路が完成。放流された鯉やグッピーがいるのでカルガモ、コサギだけでなくカワウやゴ

イサギまで来るようになった。植栽の傷み、枯れ、土の減り、などがあり、修復などは地域で行うようにしていて、多いところでは月2～3回環境保全活動が行われている。ネットニュースも生まれ、2006年には「森とせせらぎのネットワーク」という沿線10町会と小、中、高等、学校まで含めた連絡組織ができた。翌年11月に「せせらぎ祭り」をおこな



江川せせらぎ 撮影 2003年

ったところ雨にもかかわらず4500人も参加者があったと紹介された。

下水道新技術推進機構栗原所長をコーディネーターとして参加者による討論に入りました。テーマとなったのは 下水道が見えているか 下水道で何ができるのか どうしたら一緒に取り組めるか、続けられるか、これからどう活動するか。

様々なことが話し合われました。川崎では市の対応が良く、地域のアイデアを採用したり、水質検査などもすぐやってくれ、市民と行政が気軽にキャッチボールできたこと。

だめもとで市に相談する積極性も必要なこと。また行政側の休日のイベントなどへの参加が望まれること。いろいろな生き物が増えてくると、ザリガニの繁殖、ユスリカの発生、など困ったことも起こるし、大掃除の際の魚の居場所の確保などのこともある。

ビオトープではそこに行くことを楽しみにするリピーターが増える。など。

最後にコーディネーターから下記のキーワードでしめくくりがありました。

地域資源、多くの関係者、目標の共有と合意形成、協働、役割分担と連携、安全、面白さ、情報交換

終わりに、今回の研究会は、水辺づくり・管理の協働をされている方々に参加していただいた下水道関係ではじめての企画でした。感じたことは、調整池、都市のせせらぎなど

の空間は小さいものですが、いいものになれば地域にとって散策、遊び、交流の大きな宝となるということでした。公共事業に携わってきていると、施設はつくってその後できるだけ、維持してそのままよく働いてもらうという世界ですが、こういう水辺空間は、その後の管理次第によってどんどんいいものになっていく可能性があります。

また多くの生き物が棲み、楽しい水辺にすればするほど、管理責任上の問題も微妙になり、人手がかかるようになり、維持管理のため多くの人々の協業が重要になるようです。

田園地域から都市化する過程でこれまでめまぐるしく変化してきた地域の水辺が、今後はずっと長期にわたってこのままであり続けることになるわけで、こういう空間が沢山の地域で生まれ育って、年月を経た名園という存在になってほしいものです。

21世紀水倶楽部として、こういう活動がもっと盛んになるような応援をしていきたいと考えています。

#### (冒頭の安藤副理事長文の続き)

そうした場合、公的中立的立場にあるNPOが中に入ればそのような懸念を払拭できると思います。NPO設立の狙いも実はその辺にあります。

NPOの会員は現職をリタイアした人間が多いのですが、それぞれ、水の量的管理(河川)や質的管理(水道、下水道、環境)の実務に長く従事した経験を持っています。その人たちの経験と知識を生かして世の中のため人のために尽くそうというのが私どもNPOの目的です。ただ残念ながら、ほとんどの会員は大学時代に教職課程を取っておらず、児童心理学が何たるかも知りません。従って、小中学校生徒を相手の授業はすぐには出来そうもない状況にあります。しかしながら大人相手の教育・啓発活動であれば「話」をすることは可能です。またそれが得意な人間もいます。

水に関連して、色々な問題が生じてその解決策に窮したときとか知識を増やしたいというような場合、私どもにお声を掛けていただければ解決策を見出せるかもしれません。地域活動や成人教育の一環としてお役に立てるかもしれません。」(以上、校長先生への礼状)

というわけで、私は、NPO21世紀水倶楽部の「一般市民向

「啓発活動」は、2つに分け、一つは子供（小学校4年生）向け、もう一つは一般向け（中学生以上成人まで）を対象に授業や講習会を進めたらどうかと考えている。

我々に「知識」はあるというものの、子供向けには教え方のノウハウが必要である。だから、この分野はしばらくはプロに任せ、我々は少しノウハウを勉強・訓練をし、会員に伝授してゆく必要がある。

一般向けのほうはパワーポイントなどで題材を準備すれば、あとは話術の問題なので何とかなる。啓発が主体だから内容的には専門家が議論するような高度な話題は要らない。

成人といえども、蛇口をひねれば水やお湯が出、トイレの水がどこかに消えてしまうことは知っていても、水道や下水道の仕組みがどうなっているのかわかっている人は少ない。

だから、一般人には、水の循環、水質の基礎、そして河川、水道、下水道の仕組みや使い方などを判りやすく伝えていけばいいと思う。ついでにゴミ処理の話をしたって良い。聴講の相手に応じて臨機応変に中身を替えばいいのである。

そういう観点に立ってというか、割り切って、今後の当NPOの啓発活動は進めたら如何かと思う。

問題は、いかにそういう場、つまり、出前の需要を捉えるかということである。幸い、調理講習会とかPTA活動などで、この種の話をしてほしいという所もポツポツある。我々が臆することなくそれに応じ、成果を示していけば口コミで需要が広がるかもしれない。

会員の皆さんもヘジテートすることなく、ぜひ需要を拡大し、時には演壇に立つことを考えてみてはいかがでしょうか。

## お知らせ

- 伊勢崎市環境フェスティバル(10月26日の日曜日)に当NPOより廣本、野中両会員が講師として派遣され、直投型ディスプレイ普及のための説明を担当することになりました(12時より1時間)。環境フェスティバルの詳細は [伊勢崎市HP](#) > 環境部環境保全課

## 編集幹事のあと整理

前号の創刊号に続く第2号の発行にこぎ着けました。創刊準備号から通算三号目ですが、今回は原稿が盛りだくさんで、うれしい悲鳴を上げています。安藤副理事長と中川理事・事務局長からはNPO活動に関する「提言」をいただきました。これらに対し、会員の皆様は如何お考えでしょうか？お考えを伝えていただくのに、「[正論広場](#)」をご活用ください。ITグループの深堀理事からは「上下水道とIT」の解説文を投稿いただきました。同グループは最近の活動は休止していますが、今までの研究を集大成した文章になっています。

亀田理事からは4月24日の「下水道事業と地域活動」報告の前号に続く後編(2)です。盛りだくさんでしたので、二回に分けさせていただきました。会員の皆様のご意見・投稿をいただき、今後の編集に活かしていくつもりです。よろしく願いいたします。

編集幹事・望月